

第 10 回 WCC 総会に提示された二つの合意文書

－エキュメニカルな教会論と宣教論－¹

神田 健次

はじめに

一昨年(2013年)の2013年10月30日-11月8日、韓国の釜山で第10回世界教会協議会(WCC)総会が開催された。第10回という記念すべき総会が、東アジアで開催された意義は大きいものであり、筆者も、一部参加する機会が与えられた。また、総会に先立って、その準備作業を共同で行い、そして総会後も報告やシンポジウムを開催してきた。²本稿では、釜山総会の概要を叙述し、とりわけ総会に提示されたエキュメニカルな教会論と宣教論に関する二つの重要な合意文書の背景とプロセス、及びその文書の特色について叙述したい。

【1】第10回総会の概要

WCC 総会の軌跡

WCCは、第二次世界大戦の深い反省の中から、1948年にアムステルダムにおいて創立総会を開催して以降、54年には北米のエバンストンで第2回総会、61年にはインドのニューデリーで第3回総会、68年にはウブサラで第4回総会、75年にはアフリカのナイロビで第5回総会を開催している。さらには、83年にヴァンクーバーで第6回総会、91年にキャンベラで第7回総会、98年にはジンバブエのハラレで第8回総会、21世紀に入り2006年にブラジルのポルタ・アレグレで第9回総会、そして13年に釜山において記念すべき第10回総会が開催されたのである。

釜山総会での代議員数は、中央委員会で決定する追加代議員を加えて825名であり、日本の教会からは、日本基督教団が2名、日本聖公会、日本ハリストス正教会、在日大韓基督教会が各1名であった。総会では、「いのちの神よ、われらを正義と平

1 本稿は、2013年4月の神学研究会において、「第10回WCC総会の意義—教会論と宣教論を中心に」と題して研究発表した内容に、総会とその後の経緯をふまえ、多少の加筆を加えたものである。

2 筆者が、総会前に叙述した論稿は、「WCC信仰職制の課題—特に教会論を中心に」(『福音と世界』2013年7月号)であり、また総会後に叙述した論稿として、「第10回WCC総会に出席して」(韓国『基督教思想』2013年12月号)、「WCC第10回総会の礼拝から：開会礼拝」(『礼拝と音楽』2014年冬季号)、「巻頭言 エキュメニカルな宣教論の新たな地平」(『宣教学ジャーナル』第8号、2014年7月)を参照。さらに、2014年2月17日-18日、京都の関西セミナーハウスにおいて、「WCC第10回総会と日本の教会」という主題を掲げて共同の報告と討議の集いを開催した。尚、総会全体の概要としては、釜山総会で配布された英文資料及び上記の京都集会における西原廉太「世界教会協議会(WCC)第10回総会・報告」を参照。

和へと導いてください」という主題の下で多彩なプログラムが展開され、総会全体のメッセージでも「正義と平和の巡礼への参与」が呼びかけられた。

総会全体では、コイノーニア、マルトゥリア、ディアコニア、エキュメニカル・フォーメーション、宗教間の協働という5つの領域のもとで、一致、宣教、平和、アジア等の8つの全体会と21のエキュメニカル対話が設定され、世界の教会の多様な課題について具体的に討議された。その他、総会でのユニークなプログラムに、「マダン」(広場)と呼ばれるワークショップやブースの企画展示も行われ、日本の教会からは、ニュージーランドの教会との連携で東日本大震災と原発問題に関する展示及びプレゼンテーションや在日大韓教会女性会のプレゼンテーションが行われた。

総会プログラムは、毎朝、祈りと聖書によるメッセージによって始められた。今回の総会における開会礼拝はじめ、会期中の礼拝は、本当に深い感銘を与えてくれるもので、エキュメニカル運動の良質な実りとも言えるが、その深い霊性をたたえたエキュメニカルな礼拝には、世界の教会の教派的・文化的多様性のダイナミックな豊かさが反映していたと言える。今回の総会では、『釜山礼拝書』(Resources for Prayer and Praise. WCC10th Busan, 2013) が準備されて会期中の礼拝で活用され、また開会礼拝では、独自の式文の冊子 Opening Prayer が準備された。³

また、今回の総会では、多くの青年たちの参与と貢献、また約200名に及ぶ世界各国からの若い神学者の集中的な共同研修などは、新たに鼓舞されるような思いを与えられた。特に、今回の二週間にわたるグローバルなエキュメニカル神学機関 (GETI) は、これからのエキュメニカル運動を担う新たな指導層の養成プログラムとして、画期的な意義のある試みであった。

総会が東アジアにおいて開催されたこととの関係で、東アジアの視点から見れば、何よりも、開催国韓国の南北分断と統一問題が重要であり、WCCにおいて、この問題は、1990年にソウルで開催された「正義・平和・被造世界の統合」(JPIC) 世界会議において大きな焦点となった。統一問題については、会期中も多様な局面で言及され、そして総会全体の「メッセージ」においても明確に表現されたことは、「正義と平和」の主題から見ても大切な要点であった。さらに、総会で採択された「朝鮮半島の平和と再統一に関する声明」では、昨今の領土問題をめぐる東アジアの緊張関係にも言及され、長年の朝鮮半島の悲劇的な分断によって引き裂かれた民族の悲劇的苦難に終止符を打つための正義と平和の取り組みが新たに呼びかけられたことは、大きな意義をもつものであった。特に、この統一問題については、1984年にWCCの主導でアメリカ、韓国、日本のNCCを中心とした東山荘(日本のYMCA施設)会議とそれ以降の重要なプロセスに言及しつつ、更なる和解と平和にむけての具体的な取り

3 前掲の拙稿「WCC第10回総会の礼拝から：開会礼拝」を参照。

組みについて呼びかけられている。

もう一つ東アジアの視点から述べるならば、二年前の東日本で起こった大震災と津波、そして福島原発事故の問題である。この問題は、マダンにおいてニュージーランドの教会との連携で日本の教会からの展示が行われ、さまざまな反響が寄せられた。そして、特に原発問題については、総会全体での論議と反原発の方向を目指す努力がなされたが、結果として中央委員会付託となった。

最終的に提案された諸課題は、「声明」(Statement) 7 件、「覚え書き」(Minute) 4 件、決議 (Resolution) 1 件の合計 12 件であった。「声明」としては、①宗教の政治利用化と宗教的少数者の権利、②国籍を失った人々の人権、③朝鮮半島の平和と統一、④“just peace”への道、⑤中東におけるキリスト者の存在と証しの支持、⑥南スーダン・アベイにおける現在の深刻な状況、⑦非核世界 (nuclear-free world) 実現に向けて、であり、⑦だけが採択されず、2014 年 7 月の中央委員会で議決された。⁴

今回の総会では、信仰職制委員会から『教会—共通のヴィジョンを目指して』、そして世界宣教・伝道委員会から『いのちに向かって共に一変化する世界情勢における宣教と伝道のあり方』という注目すべき二つのエキュメニカル文書が提示され、それぞれ論議され、特に前者に関しては、各教会で討議されるよう呼びかけられた。前者の文書は、1982 年に成立した歴史的な合意文書『洗礼、聖餐、職務』(BEM) 以降 30 年に及ぶ信仰職制委員会の取り組みの成果として、2012 年に成立した合意文書である。後者の文書は、世界宣教・伝道委員会から提出された共同研究の成果であり、21 世紀の宣教論を考える上で重要な指針となる、2012 年に成立した文書である。

【2】信仰職制委員会から提示された『教会』の背景とプロセス

『リマ文書』以降の取り組み

世界教会協議会 (WCC) の信仰職制委員会は、歴史的なエキュメニカル文書である『リマ文書』(BEM) 以降のプロセスを継承しつつ、1993 年のサンチャゴ・デ・コンポステーラにおける第 5 回信仰職制世界会議でその総括と新たな共同研究の課題を明示した。その共同研究の課題は、これまで 1996 年のタンザニアのモシ、2004 年のクアラルンプールの全体委員会などでも論議されてきたが、それは以下の 5 つの課題に他ならない。

第一の課題は、『リマ文書』以降の継続的な研究課題であるエキュメニカルなバプテスマ論であり、とりわけバプテスマの相互承認に焦点があてられた。第二の課題は、エキュメニカルな教会論をめぐる研究課題であり、『教会の本質と宣教』という

4 総会で成立した「声明」の翻訳は、報告集会の資料集『WCC 第 10 回総会と日本の教会』を参照。また、総会後の 2014 年 7 月開催の中央委員会で成立した Statement towards a Nuclear-free World, 07 July 2014 を参照。

テキストが提示されて論議されたが、将来的には幅広い論議と受容をめざす文書として位置づけられている。第三の課題は、神学的人間学に関する研究である。『神学的人間学に関するエキュメニカルなパースペクティブ』というテキストは、共同研究の輪郭を描いたものである。現代の世界から受けている多彩なチャレンジとして、暴力、貧困、HIV/エイズなどの諸問題、また先端医療技術などの新たな科学技術の発展にともなう生命倫理の諸問題、あるいは障がい者と共に生きる問題などを、今日の教会と神学がそのような諸課題を、「神のかたち」としての人間という、聖書の中核的な人間理解の視点から神学的展開の可能性が探求された。第四の課題は、福音と文化の関係をめぐるエキュメニカルな解釈学の課題であり、継続的課題として論議された。重要な焦点になっているのは、各大陸の文化によって信仰表現が異なる問題をどのように相互に理解し合えるかという異文化間解釈学の課題である。そして第五の研究課題は、人種的・民族的アイデンティティと教会の一致への探求をめぐる課題についても、継続して論議されている。

また合同教会としての日本基督教団と関連の深い合同・合同途上教会の国際協議会は、信仰職制委員会の主導で開催されてきており、2002年にオランダで第7回協議会、そして2008年には南アフリカで第8回協議会が開催されている。エキュメニカル運動の具体的な成果でもある合同教会及び合同途上教会は増大しつつあるが、合同・合同途上教会における一致、宣教、そしてアイデンティティというテーマを中心に、世界の合同・合同途上教会がかかえる諸問題が共有され、論議されてきている。⁵

教会論のプロセス

以上、5つの共同研究の課題の中で、第一の課題の成果は、『一つのバプテスマ：相互承認を目指して』（2011年）として刊行され、また第三の課題は、『神学的人間学に関するキリスト教のパースペクティブ』（1998年）として、さらに第四の課題の成果は、『土の器の中の宝：解釈学に関するエキュメニカルな省察』（1998年）として刊行されている。⁶そして、最も重要な成果として刊行されたばかりの共同研究の成果が、『教会—共通のヴィジョンを目指して』（The Church - Towards a Common Vision, WCC-Geneva 2012）という教会論に関する成果である。⁷

ところで、信仰職制運動における教会論をめぐるのは、1927年のローザンヌにお

5 拙稿の「新しいエキュメニカルな神学的課題— WCC 信仰職制全体委員会に出席して」（『福音と世界』1996年12月号）及び「21世紀最初のエキュメニカルな神学的フォーラム— WCC 信仰職制全体委員会に出席して」（『福音と世界』2004年11月号）を参照。

6 One Baptism: Towards Mutual Recognition, WCC-Geneva 2013; Christian Perspectives on Theological Anthropology, WCC-Geneva 1998; A Treasure in Earthen Vessels: An Instrument for an Ecumenical Reflection on Hermeneutics, WCC-Geneva 1998.

7 The Church - Towards a Common Vision, WCC-Geneva 2013.

ける第 1 回信仰職制世界会議において「教会の本質」というレポートが、また 37 年のエディンバラでの第 2 回世界会議では「キリストの教会と神の言葉」というレポートが採択された。1948 年の WCC 創立総会以降は、比較教会論の段階からキリスト中心の教会論の段階へとシフトしているが、52 年のルンドにおける第 3 回信仰職制世界会議での「キリストとその教会」というレポートはまさにその点を反映している。さらに 63 年のモントリオールでの第 4 回信仰職制世界会議では、「神の目的に沿った教会」というレポートが採択されている。モントリオールまでの教会論をめぐる議論は、一つの重要なステージとなるものであった。併しながらその論議は主として聖公会、プロテスタント諸教会を中心とした段階であった。

教会論をめぐる議論が、カトリック教会及び正教会の参与による本格的な論議が始まったのは、1993 年のサンチャゴ・デ・コンポステラでの第 5 回信仰職制世界会議以降であった。とりわけ 82 年に成立した歴史的な文書『バプテスマ・聖餐・職務』とその応答のプロセスは重要な意義があり、エキュメニカルな教会論の出発点もその延長線上にあったと言える。サンチャゴ世界会議では、「信仰・生活・証しにおけるコイノーニアを旨として」という主題が掲げられた。「信仰」では、ニカイア・コンスタンティノポリス信条（381 年）の歴史的・現代的解明を意図した『一つの信仰を告白する』（1991 年）、「生活」では『リマ文書』への諸教会の応答を分析した『バプテスマ・聖餐・職務 1982 - 90 年』、そして「証し」では、「教会一致と人間共同体の革新」というプロジェクトの成果『教会と世界』が、論議された基本的文書であった。⁸

サンチャゴ世界会議以降、95 年のタンザニアのモシでの WCC 信仰職制全体委員会での討議を経て、98 年に最初の教会論の成果『教会の本質と目的』が刊行された。⁹ さらに、その成果への批判的検討を、2004 年のクアラルンプールでの全体委員会で行い、2005 年には『教会の本質と宣教』が刊行された。¹⁰ そして、2009 年のクレタでの全体委員会、2012 年のアルメニアでの常任委員会での検討を経て、最終的にペナンでの常任委員会において成立し、9 月の中央委員会で承認されたのが『教会—共通のヴィジョンを目指して』に他ならない。

【3】『教会—共通のヴィジョンを目指して』の構成と特色

合意文書の構成

「際立って重要なエキュメニカルな実現」と言える¹¹、歴史的なエキュメニカル合意

8 On the Way to Fuller Koinonia: Official Report of the Fifth World Conference on Faith and Order, WCC-Geneva 1994.

9 The Nature and Purpose of the Church: A stage on the way to a common statement, WCC-Geneva 1998.

10 The Nature and Mission of the Church: A Stage on the Way to a Common Statement, WCC-Geneva 2005.

11 The Church - Towards a Common Vision, p.39.

文書『教会—共通のヴィジョンを目指して』成立のプロセスに、筆者は、1991年のキャンベラ総会以降15年間にわたり、信仰職制委員会の委員としてその論議に参加してきたこともあり、エキュメニカルな教会論に関する合意文書の成立は特別の感慨を覚える。

『教会—共通のヴィジョンを目指して』の構成は、序論、第一章 神の宣教と教会の一致、第二章 三一の神の教会、第三章 教会：成長する交わり、第四章 世界の中の/ための教会、結論、という構成となっている。合意文書の基本的意図は、教会理解について共通の神学的合意点について叙述するということであり、併せて教会論をめぐる相違点あるいは論争点については、イタリックスで解説を加える形式をとっている。

「第一章 神の宣教と教会の一致」では、A. 神の救済計画における教会、B. 歴史における教会の宣教、C. 一致の重要性、という項目が、「第二章 三一の神の教会」では、A. 教会に対する神の御旨を識別する、B. コイノーニアとしての三一の神の教会、C. 神の救済計画のしるしと僕としての教会、D. 一致と多様性における交わり、E. 地域教会の交わり、という項目が立てられている。特に「B. コイノーニアとしての三一の神の教会」において、(a) 父、子、聖霊の神のイニシアティブ、(b) 預言者的、祭司的、王的な神の民、(c) キリストのからだと聖霊の宮、(d) 一つの、聖なる、公同的、使徒的な教会と、新約聖書と古代教会の教会理解の基本的理念についての解明がなされている。

「第三章 教会：成長する交わり」では、A. 既に、しかしいまだ尚、B. 交わりの本質的要素：信仰、聖礼典、職務、という項目が立てられている。特に、交わりの本質的要素として、最初の「信仰」では、使徒的信仰告白として「ニカイア・コンスタンティノポリス信条」（1991年の『一つの信仰を告白する』）、「聖礼典」としては、『リマ文書』の「バプテスマ」と「聖餐」のテキスト、及びバプテスマに関する成果『一つのバプテスマ：相互承認を目指して』があげられ、バプテスマと聖餐に関する『リマ文書』の合意点が要約して叙述されている。争点としては、これら二つが「聖礼典」か「主の定め」(ordinance)かという問題に言及されている。そして職務に関しては、合意点と合わせて論争点として、按手を受けた職務、三種の職務、教会の職務における権威の賜物、エписコペーの職務、エキュメニカル協議会の権威について述べられている。

「第四章 世界の中の/ための教会」では、A. 被造世界に対する神の計画：神の国、B. 福音の倫理的挑戦、C. 社会における教会、という項目が立てられている。平和、人権、エコロジー、HIV、貧富等の諸課題に言及しつつ、宣教論と倫理との関係における教会論について叙述されている。論争点として、宗教的多元主義、倫理的問題と

教会一致をめぐる問題にも言及されている。

「結論」では、「礼拝によって強められ、養われて、教会は、世界に対する預言者的で、苦しめを共に負うミニストリーによって、そして人間によって作り出される、あらゆる形の不正と抑圧、疑惑と葛藤に抗する闘いによっていのちを与えるキリストの宣教を継続しなければならない」と、結ばれている。¹²

合意文書の特徴

以上のような合意文書の第一特徴は、1927年のローザンヌでの第1回信仰職制世界会議以降、85年の共同研究の成果であるという点である。特に、『リマ文書』成立以降、30年に及ぶ共同研究の成果と言えるであろう。しかも、この文書は、ローマ・カトリック教会、正教会、聖公会、歴史的プロテスタント諸教派、福音派の一部を含む、広範な教派的広がりをもっているのである。

第二の特徴は、この合意文書が1982年に成立した『リマ文書』及び『一つのバプテスマ』、あるいは1990年の『教会と世界』、そして1991年の『一つの信仰を告白する』といった信仰職制委員会の重要な共同研究の成果を集約した点である。さらに、先述の神学的人間学に関する研究、福音と文化の関係をめぐるエキュメニカルな解釈学の課題、人種的・民族的アイデンティティーと教会の一致への探求をめぐる課題も反映しているのである。

さらに第三の特徴は、BEM以降急速に進展した二教派間対話の成果が反映している点である。即ち、1987年『マイセン共同声明』（英国教会とEKD）、1992年『ボルヴォー共同声明』（英国教会と北欧のルーテル教会）、1999年『権威という賜物 III』（カトリックと聖公会）、1999年『義認の教理に関する共同宣言』（カトリックとルーテル教会）、2006年共同声明『一致と宣教における共なる成長』（カトリックと聖公会）などがあげられる。

そして第四の特徴は、合意文書の教会論に宣教論的考察が随所に反映されている点である。第一章では、神の宣教の視点で教会理解が明示されているし、第四章「世界の中の / 世界のための教会」においても、全体として宣教論とのクロスの考察が貫徹されているのである。

12 op.cit., p.viii.

【4】世界宣教・伝道委員会から提示された合意文書の背景

世界宣教会議の軌跡¹³

世界宣教会議の嚆矢は、1910年にエディンバラで開催された歴史的な世界宣教会議に求められる。エディンバラでは、「世界の福音化」という主題で欧米主体の宣教理念が前面に押し出された。エディンバラ以降、1921年に「国際宣教協議会」(IMC)が設立され、そのIMCのもとで28年にエルサレムで世界宣教会議が開かれ、非キリスト教的な生活と思想との関係でキリスト教的な生活と思想の問題が宣教論的関心事として論議された。さらに38年のタンバラムにおける世界宣教会議では、諸宗教の現実における福音伝達の在り方が問われ、H. クレーマーが神学的に重要な貢献を果たした。

戦後最初のIMC主催による世界宣教会議は、1947年にカナダのホイトビーにおいて「主への服従における協力関係」という主題で開かれ、第三世界の教会の声が次第に大きく反映し始め、欧米主体の従来の宣教的関係に強く反省が迫られた。また52年には西ドイツのヴィリンゲンにおいて、「十字架の下での宣教」という主題で宣教会議がもたれ、教会の宣教活動全体の基礎と本質に関して根本的な再考を促す「神の宣教」(missio Dei)の理念が提起された。さらに58年のガーナのアクラにおける宣教会議では、1948年に成立したWCCにIMCが機構的に合流するという提案が出され、統合することが決定された。そして1961年にニューデリーで開催された第3回WCC総会において、このIMCがWCCに機構的に統合するという決定が具体化され、「教会の一致」と「宣教」との関係が切り離しえないものとして確認されたのである。

ニューデリー総会以降、IMCはWCCの中に機構的に位置づけられ、「世界宣教・伝道委員会」(CWME)として新たに発足する。その最初が1963年にメキシコ・シティで開催された世界宣教会議であり、「六大陸における宣教」という主題は、従来の一方通行的な「西欧宣教」(Western Mission)を止揚し、六大陸の教会間の相互交流を基礎にすえた「世界宣教」(World Mission)の理念を鮮明に表現している。さらに72-73年のバンコクでの世界宣教会議では、「今日の救い」という主題によって宣教の内容が問われた。宣べ伝えるべき福音による救いは、単に個人の魂にだけ関わるのではなく、一人の人間全体に関わり、社会的責任をも包摂する救いにほかならない、という包括的な宣教理解が主張された。

1980年にメルボルンで開催された世界宣教会議では、「み国をきたらせたまえ」という主の祈りの一節が主題として掲げられ、福音の方向性というものが「貧しい者への

13 拙稿「宣教論の現代的展開—エキュメニカル運動の軌跡の中から」(『神学研究』第33号、1985年)、及び世界教会協議会・世界宣教伝道委員会『和解と癒し—21世紀における世界の伝道・宣教論』(神田監修、加藤誠訳 キリスト新聞社 2010年)の拙稿「解説」を参照。

福音」として定式化された。イエスの御国の福音を、貧しい者の側に立つ福音として定式化し、同時に癒しの共同体としての教会についての働きについても言及している。また 89 年にサン・アントニオで開催された宣教会議では、「み心をなさせたまえーキリストに従う宣教」という主題がすえられた。サン・アントニオでは、キリスト教と他宗教との関係をめぐって再度論争され、一定の合意を得ている。また初めて、宣教についての主題が被造世界全体に拡大され、人間と自然の苦難との関係で、神の宣教の働きに焦点が置かれたのである。

さらに 1996 年にブラジルのサルヴァドールにおいて世界宣教会議が開催され、「一つの希望に召し出されてー多元的文化における福音」という主題が掲げられ、新たにエキュメニカルな宣教論の重要な主題となってきた福音と文化の問題、とりわけ多元的文化における福音の問題をめぐって論議された。そして、21 世紀を迎えての最初の世界宣教会議が、「来たれ、聖霊よ、我らを癒し、和解させたまえーキリストにより和解と癒しの共同体に召しだされて」という主題を掲げて、2005 年にギリシャのアテネにおいて開催されたのである。

WCC の宣教指針『宣教と伝道：エキュメニカルな宣言』（1982 年）¹⁴

エディンバラにおける世界宣教会議以降、それぞれの時代状況に応答する多彩な宣教論が論議されてきたが、その重要な成果として、1982 年に WCC の中央委員会で承認された『宣教と伝道：エキュメニカルな宣言』（Mission and Evangelism : Ecumenical Affirmation）の文書があげられる。それは、エキュメニカルな宣教会議の軌跡を歴史的背景とし、「宣教と伝道についての課題と可能性を捜し求める経験・パースペクティブを提議しよう」としたもので、WCC の宣教・伝道論の基本的指針である。全部で 7 項目のエキュメニカルな宣言が叙述されているが、その第 1 項は「回心」というテーマであり、第 2 項は、「生活のすべての分野に向けての福音」という 1973 年のバンコク宣教会議で焦点となった包括的宣教理解に関するものである。また第 3 項は、「神の宣教を担う教会とその一致」というテーマで、1952 年のヴィリゲン宣教会議で提起された神の宣教（missio Dei）を反映しており、第 4 項は、「キリストの歩まれた道に従う宣教」という 89 年のサン・アントニオ宣教会議のテーマとなっている。さらに第 5 項は、「貧しい人々への福音」という 80 年のメルボルン宣教会議のテーマがあげられ、第 6 項では、「六大陸において、またそれにむけての宣教」という 63 年のメキシコ・シティ宣教会議のテーマが掲げられている。そして最後の第 7 項は、「現実の他宗教に生きる人々の間での証し」という宗教間対話の課題

14 J.Stromberg(ed.), Mission and Evangelism : An Ecumenical Affirmation, WCC-Geneva 1983 (『現代の宣教と伝道』松田和憲訳、新教出版社 1991 年)

となっている。

1982年に、エキュメニカルな宣教論の成果が公にされて以降、89年のサン・アントニオ、96年のサルヴァドールにおける宣教会議などの新たな展開をうけて、2000年にWCCの世界宣教・伝道委員会(CWME)は、『今日の一致における宣教と伝道』(Mission and Evangelism in Unity Today)を作成し、諸教会における研究文書として採択している。¹⁵この文書は、「宣教」(Mission)と「伝道」(Evangelism)の用語的な区別を明確にし、それぞれの定義を試み、またサン・アントニオ及びサルヴァドールの宣教会議の成果を盛り込んだ文書として重要であるが、WCC全体の宣教論の指針とはなっていない。

【5】『いのちに向かって共に』の構成と特色

『いのちに向かって共に』の構成

21世紀の宣教論を考える上で重要な指針となる『いのちに向かって共に—変動する世界情勢における宣教と伝道』(Together towards life : mission and evangelism in changing landscapes, WCC-Geneva 2012)という文書は、WCCの世界宣教・伝道委員会が、2006年のポルト・アレグレ総会以降、取り組んできた21世紀における宣教・伝道論の成果である。¹⁶この文書は、2012年の中央委員会でWCCの新しい宣教・伝道論の宣言・指針として承認され、WCCの世界宣教・伝道委員会から提出され、総会で討議されたのである。このエキュメニカルな文書は、「変化する世界情勢における、宣教・伝道に関する理解と実践を刷新するための展望と理念、そして方向性を探究すること」を旨としているのである。¹⁷これまでのWCCの宣教論の基本的指針となってきた文書は、1982年に成立した『宣教と伝道：エキュメニカルな宣言』であったので、今回提出された文書は30年ぶりに新たに更新された文書である。

合意文書『いのちに向かって共に—変動する世界情勢における宣教と伝道』の内容的な構成は、以下の通りである。

第一部 いのちに向かって共に：テーマ解題

第二部 炎の息：変革をもたらす霊性

A. 霊の宣教、B. 本質において被造世界に関わる宣教、

15 Mission and Evangelism in Unity Today, in: "You are the Light of the World. Statements on Mission by the World Council of Churches 1980-2005", WCC-Geneva 2005.

16 Together towards Life : Mission and Evangelism in Changing Landscapes," Resource Book WCC 10th Assembly, WCC-Geneva 2013." この文書の抄訳については、「WCC第10回総会に向けての文書『いのちに向かって共に』」(村瀬義史訳、『福音と世界』2012年8月)を参照。なお、村瀬義史は、昨年7月の日本宣教会学術大会で、この文書の詳細な分析と評価を行っている。

17 op.cit., p.51.

C. 靈的賜物と判断、D. 変革的な靈性

第三部 地の塩：周縁からの宣教

A. 周縁と周縁化、B. 闘いと抵抗としての宣教

C. 癒しと包括性としての宣教、D. 正義と包括性を求める宣教

第四部 いのちの水：愛をもって真実を語ること

A. 伝道への呼びかけ、B. 真正の伝道

C. 伝道、宗教間対話、キリスト者のプレゼンス、D. 伝道、預言、宣言

E. 伝道と諸文化

第五部 変化の風：動きゆく教会

A. 変化してきている世界のキリスト教情勢

B. 謙遜と尊敬をもった宣教、C. 宣教において教会を力づける神

第六部 いのちの祝宴：結びの宣言

合意文書の特徴

この合意文書の第一の特徴は、1982年の文書以降、30年間の宣教論の取り組みの成果が盛り込まれている点である。さらに言えば、1910年のエディンバラ世界宣教会議以降の取り組みを考慮すれば、100年以上のエキュメニカルな宣教・伝道論の成果と言えるであろう。しかも、30年前の文書と比較して、カトリックや福音派とのより広範な宣教・伝道論をめぐる対話の成果が反映しているのである。

第二の特徴は、「神の宣教」(missio Dei)の神学的理念が一貫して中心的な宣教論のキーワードとなっている点である。しかも、30年前の文書には必ずしも十分とは言えなかった三一論的な神の宣教が強調されていることは注目すべきであろう。この背景には正教会の神学的貢献がうかがえるが、特に聖霊による宣教という聖霊論的アプローチが、被造世界の問題との関わりで重要な展開となっている。

第三の特徴として、「変化する世界情勢における宣教と伝道のあり方」という合意文書の副題が示唆しているように、地勢的な転換において宣教と伝道のあり方が展開されているという点である。30年前の『宣言』においては、「六大陸における宣教」という項目において、欧米宣教から世界宣教へのパラダイムシフトが明示されていたが、南半球のキリスト教人口が北半球を凌駕したことを受け、かつては周縁とされていた非欧米地域からの宣教、あるいは多様な周縁的状况からの宣教という視点が強調されているのである。

第四の特徴として、伝道論の新たな展開があげられる。2000年に出された『今日の一致における宣教と伝道』では、宣教と伝道との明確な区別と定義が行われ、伝道は、「福音の明確で、意図的な呼びかけに焦点を置き、キリストにおける新たないの

ちと弟子となることへの人格的な回心への招きを含んでいる」と規定されている。そこには、ローザンヌなどの福音派との対話の反映もうかがえるが、しかしながら改宗主義的な伝道のあり方には一貫して批判的であり、宗教間対話に開かれた理解を示しているのである。

そして第五の特色として、宗教と文化の多元的状況を射程にいった宣教と伝道論という点があげられる。WCCは、96年のサルヴァドール世界宣教会議において、多角的な文化における福音宣教の在り方について論議を深め、またいわゆる9.11直後には、宗教間の対話と共存関係を強く呼びかける「他宗教に生きる人々との対話と関係のために—エキュメニカルな考察」という文書を出している。¹⁸このような文化と宗教と文化の多角的状況における宣教と伝道の理解が、合意文書にも貫かれているのである。

結 び

以上、釜山総会の概要を叙述し、とりわけ総会に提示されたエキュメニカルな教会論と宣教論に関する二つの重要な合意文書の背景とプロセス、及びその文書の特色について叙述してきた。最後に、日本の教会の課題として、両文書の翻訳及びWCCの加盟・準加盟教会での検討があげられるであろう。特に、『教会』はすでに各加盟教会に送付され、2015年12月までに、その文書に対する公式な応答が要請されているのである。

18 世界教会協議会『宗教間の対話と共生を求めて—エキュメニカルな指針』（NCC 宗教研究所双書 神田健次編、村瀬義史訳 新教出版社2006年）